

# ネイティブと日本人、二人の教員が交互に担当 クラスのムードを和やかにし、モチベーションを上げる

2018年度春学期ティーチングアワード受賞  
対象科目：朝鮮語（入門）01

朝鮮語を初めて学習する学生を対象にしたこの授業は、グローバルエデュケーションセンター（GEC）設置科目であり、履修学生の学部、年齢は多様だ。早稲田全体で留学生が増えていることもあり、第3第4の外国語として朝鮮語を履修する留学生も多く参加し刺激となっているという。音読や会話など能動的学習を多く取り入れ、「一人ひとりをしっかり見てくれる」「授業が分かりやすい」「文化にも触れられた」と学生から高い評価を獲得した。



## 同じ授業を担当する教員同士で、 授業内容の工夫を共有する

この授業はふたりの教員が15回の授業を交互に担当している。通常複数の教員がひとつの科目を担当する場合、前半後半で分けるか分野で分担することが多いが、この授業の場合は1冊の同じテキストを使い、リレー方式でつないでいくのが特徴だ。そのため毎回の進捗状況については綿密に連絡を取り合うことが必須となる。GECに設置された朝鮮語入門のクラスは全部で10クラスあり、すべて各2名の教員が担当している。教員はそれぞれ綿密に連絡を取り合い、授業内容を共有するように努めている。

## ペアワークでの発話練習に多くの時間を割く

「この表現を教えるときはこの歌を紹介するといいか、こういうゲームを取り入れると反応が良かったなど、各先生が授業に使った例を報告してくれるので、参考になることがたくさんあります」（金准教授）。

使用しているテキストは各クラス共通で、扱っている文法的要素が絞り込まれているという。テキストがシンプルな分、

K-POPの歌詞を翻訳したり、クイズ形式にしたり、教員がそれぞれ個性を発揮してプラスアルファの工夫の余地があるので、教育効果向上のヒントを得るのに役立つというわけだ。

語学の入門クラスでは自分の身体を通じた学びが重要なことから、読み書きスキルをつけるために小テスト

トを毎回行うほか、発話練習に重点を置き、ペアワークを多く取り入れている。「必ずしゃべって帰る」ことを徹底するため、このペアワークには90分のうち3分の1から半分の時間を充てている。その日に習った内容を音読したり会話してみたりというアクティビティを行わせ、教員はその様子を見て回る。発音のチェックなどフィードバックを行うと共に、個別にしか声をかけられない学生への質問に答える時間にもなる。

朝鮮語への興味や関心を喚起するために、朝鮮半島事情や文化、社会などの知識を伝える時間も盛り込んでいる。「たとえば、数字を教えるときに簡単な年表を書いて現代史のミニ講座をやりました。歴史の勉強というとハードルが高いけれど、短時間にちょっと話すだけなので関心を持って聞いてくれます。食べ物の単語を学ぶときに、その背景知識を話すこともあります」（神谷講師）。学期に1回は韓国映画を見せる時間も設けており、この年は南北会談のニュースに関連して南北分断を扱った作品を取り上げた。

このクラスは、日本人の教員と朝鮮語ネイティブの教員がペアを組んで担当している。日本人が間違えやすいポイントや日本語との微妙なニュアンスの違いなどは日本人教員が説明しやすい一方で、発音や韓国事情という面では

### ネイティブと日本人、それぞれのメリットで効果的な指導

ネイティブ教員ならではの指導が生きる。両者がバランスよく機能していることも、この授業が成功している一因のようだ。「細かな音の違いを正確に発音し分けるために努力するのは大切だけれど、それがすべてではない。私の日本語は完璧ではないのに、学生たちは上手だと言います。そのことは、実際はそんなに細かくこだわらなくても大きな問題はないというメッセージになっているのかなと思います」（金准教授）。

現在一番の悩みは履修人数が多すぎることだ。母親世代の韓流ブームや昨今のK-POP人気の影響もあり、ここ数年履修希望者が大幅に増えている。すでに独学である程度学んでいるなどモチベーションが高い学生もいる一方で、必修だからという理由で履修している学生もあり、学習意欲には差がある。理想は25人ぐらいと感じているが、40人もいると全員分の発音チェックが難しくなる上、ペアワークの組み合わせを毎回変えたくてもできないのが実情だ。現在使っている教室は机が固定されていて使いにくいいため、アクティブラーニング用の教室の利用も検討している。

語学にしては比較的大人数な授業では特に、学生同士が率先してフォローし合うような関係が大切だと考え、和やかな雰囲気づくりに留意しているともいう。毎年同じことをやっているつもりでも、うまくいくときとそうでないときもあるというなかで、本賞を受賞した2018年度春学期の授業は、クラスがとても盛り上がったという実感があったという。「私たち教員も楽しく、いい雰囲気です。学生のモチベーションにも大きく影響するので、クラスのムードは大切です」（神谷講師）。

楽しく勉強させたいというのも、ふたりの教員共通の思いだ。「ここで1年勉強したらおしまいというのではなく、もっとやりたいなと思って終わってほしいんです」（神谷講師）。当初はそれほど意欲のみられなかった学生が、旅行や学内の韓国人留学生との交流などをきっかけに目の色が変わり、結果的に長く続けて留学するというケースもある。「毎年12月に学内で朝鮮語のスピーチコンテストがあるのですが、かつての教え子が立派に成長している姿を見るのは感無量ですね」（神谷講師、金准教授）。

※所属・資格は受賞時のもの